被服製作の指導法に関する研究（1）
―日本と米国の中等教育における被服構成の指導法に関する比較―

夫馬佳代子・犬養優希

キーワード：型紙教育．市販型紙．囲み製図

1．　はじめに

学校教育における家庭科の中で，被服実習を取り扱う教育的意義については，様々な見解が見られるが，指導要領の改訂を重ねる毎に，内容の精選，時間数の削減等の対象となり，被服実習は選択内容として扱われる傾向にある。小学校段階では，基礎的技能の習得，創作的活動，体験学習などの教育的目的から，「小物作り」など身の回りの物作りに関する題材が基礎的課題として位置付けられている。しかし，こうした題材観で中学校・高等学校段階まで系統立てて被服実習を扱うことは少ないのが現状である。こうした背景として，社会的要因と被服製作に関する教育内容そのものが抱える問題点が考えられる。

社会的要因は，戦後職業教育の一環として「洋裁」等衣服を仕立てる技術習得は，女性の自立を考える教育と捉えられた時代から，今日の既製服社会となり，被服製作そのものが，日常生活に必須の活動から大きく変容したことにある。

一方，被服製作に関する教育内容が抱える問題点については，拙稿「米国からの寄贈教科書に記載された被服構成内容」[1] においても，その一端を記したが，和服から洋服に転換する際の構成の捉え方の相違点の問題があったと考えられる。和裁は「裁つ」ことから始まり，「折る積り」は基本的な作業である。これを洋裁に置き換えると，製図し型紙から作ることになる。昭和10年に文部省は，学校教育における被服実習内容を和裁から洋裁中心の内容に切り替えることを提示したが，これは平面構成から立体構成へと従来の被服構成の発想の転換をはかることにもなった。学校教育では，洋裁を平面に置き換え，原型から製図し，型紙を作成する方法で立体構成の理論を理解しようと試みた。[2)~4)]

こうした教育内容に対し，当時の米国に日本教育視察団は「割り出し式製図法による洋裁の教育が日本婦人の民主化を妨げる」[5]「普通教育に製図まで教えるのは行き過ぎである。非教育的である。」[6] などの勧告をし，「図法教授を廃して，パタンを採用主義の教授を試行すべし」[7] との方向を示した。しかし，これに対して「日本人は縫うことよりも裁つことを知りたいのです。裁てなくては，縫えないと考えているからです」[8] など，被服構成の解釈の相違からの反論や，「洋服が縫えるが型紙が作れないのでは，わが国の実生活には間に合いません」[9] など，既製服や市販型紙が充足していない社会状況からの反論もあり，洋裁の指導内容に関し論争が繰り返されていた。このように洋裁を学校教育の一環である被服実習として如何なる内容で定着させ[10]，どのような学習効果を期待するのは，当時から混沌とした状態であったと考えられる。

本研究では，上記で述べたような経過を経て今日に至る中等教育の被服構成の内容及び製作の指導法の抱える問題点を整理し，既製服社会を前提とした今後の被服教育の教育的意義の再検討を試みる。特に本報では，現在の日本の中学校・高等学校の教科書分析をもとにした教授内容と，洋裁の導入に大きな影響を与えた米国の中等教育の家庭科教科書に掲載される被服構成の教授内容を対比し，日本の被服構成概念の特徴を明らかにしたい。

２．　研究方法

研究方法は，表１に示す日本と米国で使用される家庭科の教科書の被服構成に関する指導内容について比較・検討した。

日本の調査対象教科書は，1993年（平成５年）に検定された高等学校で使用されている「家庭一般」の教科書７冊である。米国の調査対象教科書は，日本の調査対象教科書と同時期に発行され，領域構成が「家庭一般」と類似した教科書５冊を選出した。

教科書内容の比較の観点は以下に示す４点である。

１）教科書全体における被服領域の占める割合，及び被服領域における製作関連内容の占める割合
２）被服領域における教材内容
３）製作関連内容の構成
４）型紙の取り扱い

表１　被服領域における教材内容

	日本の教科書							アメリカの教科書				
	A	B	C－１	C－２	D	E－１	E－２	A	B	C	D	E
身支度										○		○
ファッション								○	○	○	○	○
被服と人間	○		○		○	○						
被服の機能	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		○
日常着の選択	○	○	○	○		○	○	○	○		○	○
被服計画（ワードローブ）	○		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
被服材料	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
被服整理	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
被服構成	○	○	○	○	○	○	○					
被服のデザイン	○	○	○	○	○			○	○	○	○	○
動作と被服（ゆとり量）	○	○		○		○	○					
道具に関する内容							○	○	○	○	○	○
採寸	○	○	○	○	○	○	○	○	○			
型紙	○		○		○	○	○	○	○	○	○	○
型紙の補正のし方			○	○		○	○	○	○		○	
地直し		○	○	○		○	○	○		○	○	
基礎縫い	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
構成技術	○	○	○	○	○	○	○	○	○		○	○
製作	○	○	○	○	○	○	○					
衣服のリサイクル	○	○					○		○		○	○
衣服の修繕								○		○	○	○
衣服の仕立て直し								○	○		○	○
衣服の処分	○				○							

３．　被服に関する領域の構成

調査対象教科書の各々における被服領域に該当する内容が占める割合を，図１に示す。日本の教科書では，被服に関する掲載量が44％である教科書を除くと，各冊20％の掲載量である。米国の教科書も13％から21％のばらつきが見られるものの20％前後の掲載量となり，家庭科における被服領域の取り扱いは掲載量から推測すると同程度であることが分かる。図２は，この被服領域を全体として，製作を扱う内容及びリフォームに関連する内容の占める割合を示したものである。この図から，日本の教科書では被服領域の40％から50％，米国の教科書では40％が製作に関する内容に充てられていることが分かる。しかし，記載内容の内訳を見ると，両国の構成の捉え方の違いが見られる。日本の場合，製作関連内容の理論に関する教授内容よりも，実技に関する記載内容が２から３倍多い。一方，米国の場合，構成理論は実技と同程度，あるいは２倍近く掲載される。さらに，リフォームに関する内容は，米国の教科書全てに記載されている。日本の場合，リフォームの理論を若干扱う教科書が見られるものの，実技に関する記載はない。

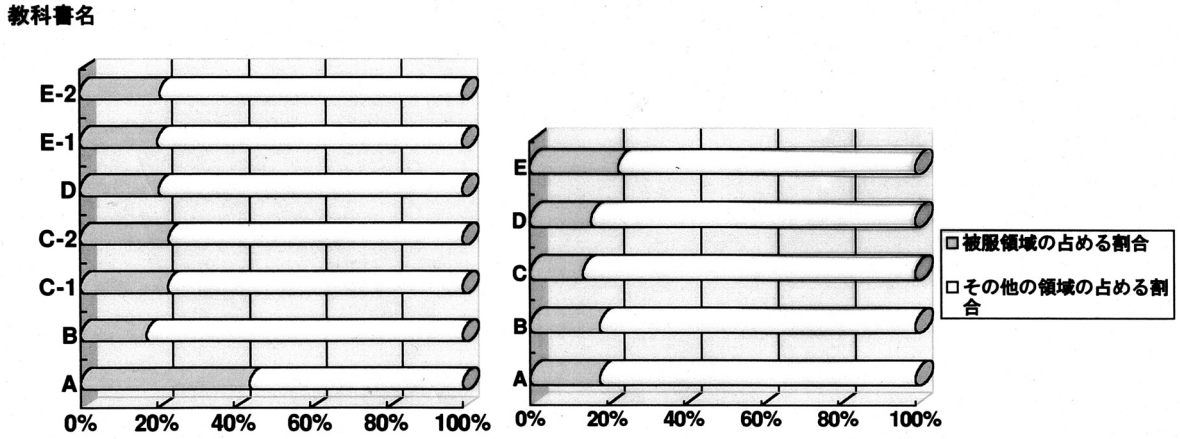


図１　教科書全体における被服領域の占める割合

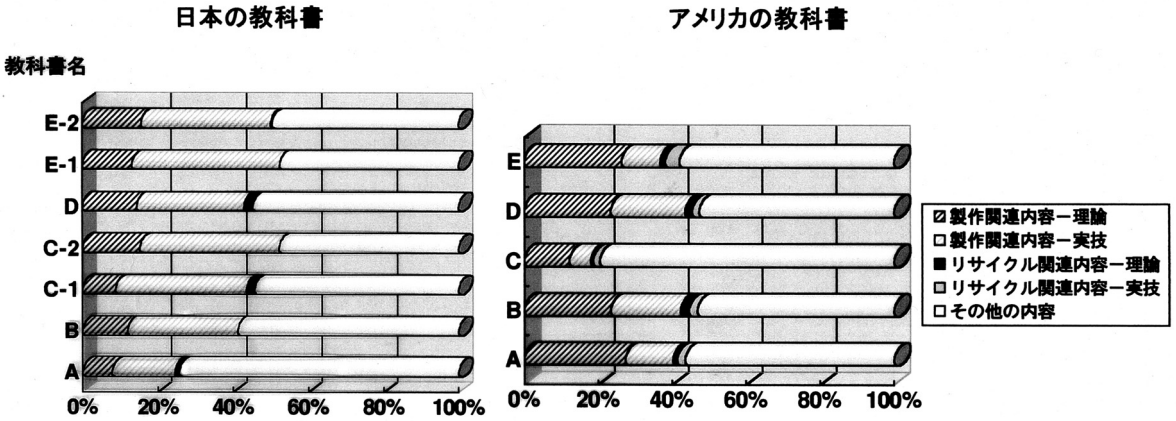


図２　被服領域における製作関連内容及びリサイクル関連内容の占める割合

このように教科書の記載分量から推測すると，日本の被服構成は米国に比べ新たに衣服を作る実技に重点が置かれているが，リフォームなど実技を応用するという観点は見られないなど，両国の技術の捉え方に違いが見られる。

被服領域の構成を教材内容から捉えたのが表１である。表中の○印は記載があることを示す。この表からも，両国の被服構成の概念に相違が見られる。まず衣服の捉え方を，米国の教科書は「身支度」「ファッション」など他者との関係から社会的に捉えるのに対し，日本の教科書は，「被服と人間」など，機能面や文化的側面から捉える傾向がある。日本の教科書が積極的に扱っている内容としては，「被服の構成」「動作とゆとり量」「採寸」「製作実習」などの項目である。米国の教科書が積極的に扱う項目は「道具に関する内容（裁縫用具の解説）」「型紙」「衣服のリサイクル」「衣服の修繕」「衣服の仕立て直し」「衣服の処分」などである。これらの教授内容から明らかになる点は，日本の場合は一つの被服製作を「被服と人間」「被服の構成」「動作とゆとり量」「採寸」「製作実習」の一連の学習を通して習得させる構想に対し，米国の教科書の製作に関連する項目には，製作過程を示す項目は見られない。「道具に関する内容」「型紙」「基礎縫い」「構成技術」「衣服のリサイクル」などの個々の内容が独立して扱われ，市販型紙を活用して如何に製作に結び付けるかは，各自に委ねられている。

４．　教材配列からみた被服構成の概念

表２は，米国の教科書Ｙoung　Ｌivingの教材配列を一覧に示したものである。これは，米国の教科書の一般的な教材配列の事例を示している。この教科書では，デザイン，衣服の管理と購入，自分に適した型紙の選択，衣服を作り上げるために必要な裁縫の基本，衣服の修繕と仕立て直しの流れで

表２　アメリカの教科書における被服領域の教材配列の事例

章／レッスン	項　目	内　容
第15章　良く見せること １．個人の健康と身なりを整えること	健康の重要性	
	身支度の良い習慣を作る	・肌
	手，足，つめ	
	髪	・歯
	あなたの外見と身支度	
２．衣服を決めること	衣服の目的	
	衣服を決める	・場合にあった衣服
	衣服－衣服が伝えるメッセージ	
	自己表現	・第一印象
	衣服を賢く選ぶ	
３．衣服のデザイン	色が外見に与える影響	・色を選ぶ
	衣服のライン	
	衣服の素材	
	ファッショナブルな組み合わせをする	
第16章　ワードローブ計画 １．必要なものを決める	自分のワードローブを見る	・自分のワードローブに必要なもの
	ワードローブ目録を作る	
	自分のワードローブを広げる	・基本から組み立てる ・アクセサリーを加える
	うまくいくワードローブ	
２．品質と体に合っているかを評価する	生地の品質を識別する	・繊維と生地 ・布目 ・織物の終わり方
	作りの品質を識別する	
	着心地の良い衣服	・体に合う一番良いものを見つける ・肌触り ・心地よさとスタイル
３．衣服を買う	買い物計画	
	ラベルに書いてあること	・手入れ表示 ・衣服のブランド名
	価値ある買い物	・衣服の予算を伸ばす ・１回着ることにかかる費用を理解する
４．衣服の手入れ	衣服を手入れする	
	衣服を清潔に保つ	・染みや汚れを取り除く ・衣服を洗う ・衣服を乾かす ・衣服にアイロンをかける
	衣服を保管する	
	自分を最も良く見せる	
第17章　縫う準備をする １．被服実習室と設備	被服実習室	・被服実習室での安全 ・時間を管理する
	裁縫設備	・小さな裁縫道具 ・ミシン
	ミシンを使う	・ボビンに糸を巻く ・ミシンに糸を通す ・ステッチの種類 ・ミシンを操作する
２．型紙を選ぶ	型紙の選び方	・型紙の中に探すもの ・多くのサイズに対応できる型紙 ・簡単に作れる型を見つける
	自分の型紙サイズを決める	・正しい型紙のサイズを見つける
３．生地と小物を選ぶ	生地の選び方	・生地の品質を識別する ・生地の選び方 ・避けるべき生地
	小物を選ぶ	
	選択	
第18章　裁縫技術 １．型紙と生地を準備する	ガイドシートを利用する	
	型紙のパーツを用意する	・型紙寸法を確認する
	生地の準備の仕方	・生地を収縮加工する ・布目を確認する
２．縫い始める	型紙のパーツを使う	・まち針でとめる ・裁断する ・印を付ける
	基本的な裁縫技術	・真っすぐ縫う ・カーブを縫う ・角を曲がる ・合わせ目の終わりを加える
３．ロックミシンを使う	ロックミシンとは	・ステッチのタイプ
	ロックミシンの利用	
	ロックミシンの使い方を学ぶ	・ロックミシンを使い始める
	ロックミシンの利点	
４．計画を立てる	計画を構成する	・ステイステッチ ・ダーツを縫う ・ギャザーを入れる ・生地をゆるめる ・ケーシングを作る ・見返しを作る
５．衣服の修繕と仕立て直し	手縫いの技術を使う	
	衣服を繕う	・小さな裂け目や穴を直す ・ボタンを付け直す ・他の閉じ口を直す
	衣服の仕立て直しをする	
	衣服のリサイクル	

教材が配列され，被服構成技術は独立して扱われている。被服領域における教授内容の相互の関連から，米国の製作関連の構想を図式化したものが図3である。

一方，表3は日本の教科書における被服領域の教材配列の事例を示したものである。被服の機能と着装，被服の購入と整理，被服製作の順に教材が配列され，被服製作はデザイン，型紙，裁断，裁縫の順に，製作過程に応じて掲載されるのが特徴である。この製作過程を図式化したのが図4である。

まず，図3に示す米国の製作関連の構想の特徴は，「被服とは」など被服の構成上の特徴は扱わず，実生活に活用できる型紙の選び方から始まっている。製図は教科書に記載されていない為，ここで扱う「型紙」は全て「市販型紙」を示している。構想を示す図では，「型紙の選び方」「生地の選び方」「小物の選び方」「裁縫道具」「型紙の配置・裁断・標付け」「縫い合わせる」など，市販型紙を活用した一連の製作活動を示しているが，指導の姿勢は，被服製作に取り組む場合の基礎的な技術の取得を意図し，これらの学習過程を通し

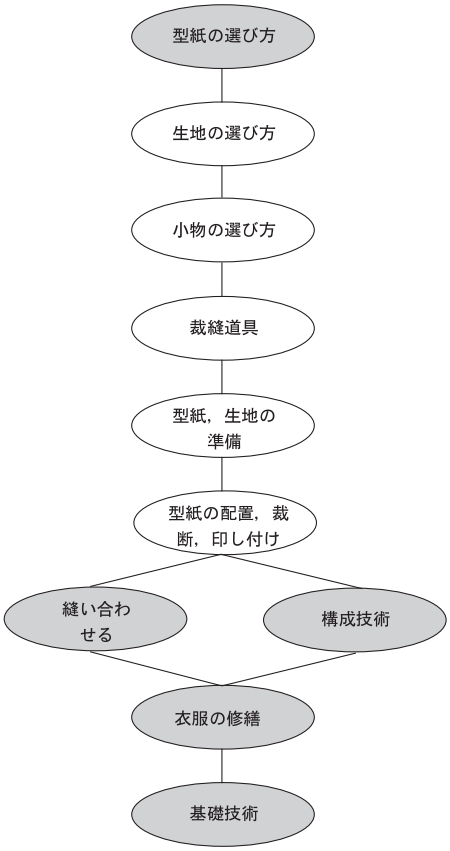


図3　アメリカの教科書における製作関連内容の構成図

表3　日本の教科書における被服領域の教材配列の事例〈C－2 教科書〉

大　項　目	項　目	内　容
1．被服の機能と着装	被服の機能	・保健衛生的機能 ・社会的機能 ・生活の場への適応
	日常着の着装	・日常着の着用目的 ・季節と着装
2．被服材料と被服管理	被服材料の性能と選択	・被服材料の種類 ・繊維の種類と性能 ・繊維製品の種類と性能 ・繊維製品の生産と消費
	被服計画	・被服費の特質 ・家族の被服計画 ・被服の選択と購入
	被服整理	・被服の手入れ ・被服の保管 ・衣生活と省資源
3．被服製作	被服の構成	・立体構成と平面構成 ・被服のデザイン
	日常着の製作準備	・体型の特徴 ・寸法のはかり方 ・原型
	シャツの製作 ジョギングパンツの製作 キュロットスカートの製作 パーカーの製作	・デザインと材料 ・型紙のつくり方 ・裁断 ・縫製
	スカートの製作	・デザインと材料 ・型紙のつくり方 ・裁断 ・仮縫いと補正 ・裏布裁断 ・本縫い

て「一着の衣服を作る」という製作活動が含まれていないのが特徴である。例えば「ボタン付け」などの基礎技術は，「衣服の修繕」項目に含まれている。

図４に示す日本の被服構成の構想は，和服に代表される平面構成と洋服に代表される立体構成について取り上げ，平面の布を立体である体に合わせる理論について学ぶ。具体的には，採寸やサイズに関する内容について学んだ後，型紙の項目に入る。ここでは，必ず立体裁断法と平面製図法について解説されている。さらに，平面製図法では「原型を基にした製図」「囲み製図」「市販型紙」の3種のパターンの特徴について取り上げられている。

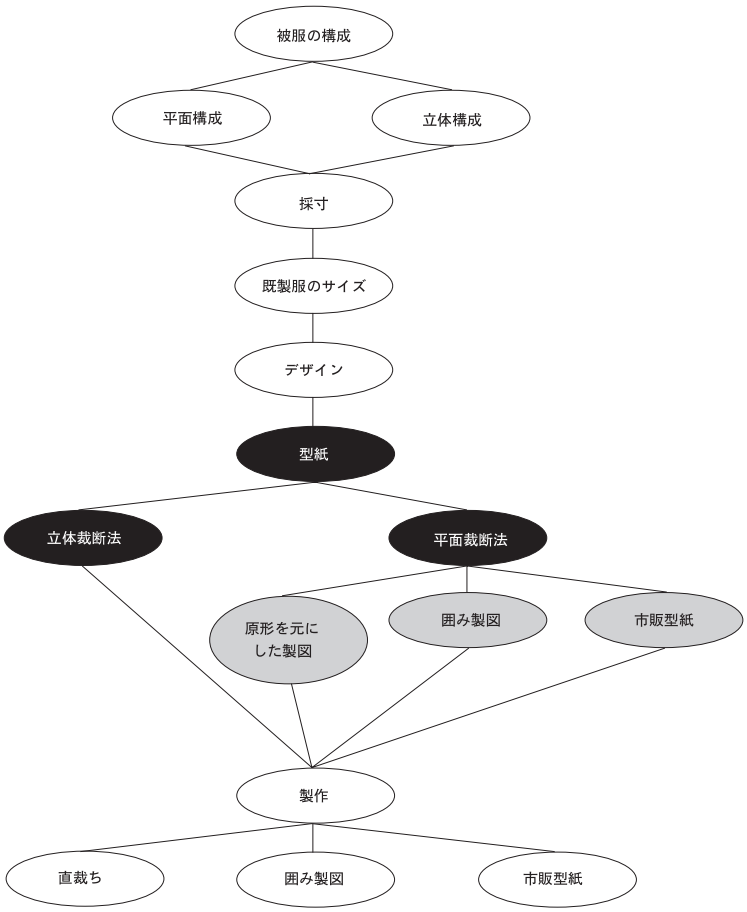


図４　日本の教科書における製作関連内容の構成図の例

これらの過程を学んだ後，いくつか掲載される教材事例を基に被服製作に取り組む構成となっている。具体的に被服を製作する過程を通して，被服の構成理論や，それに付随する基礎技術を取得する内容構成になっているのが，日本の教科書の特徴である。米国に教科書に比べ，型紙の製作過程を重視し，構成を平面と立体という両側面から捉えていることが分かる。

５．「型紙」の概念

米国と日本の被服に関する教材内容について比較した結果，図３．４で示した製作関連内容の構成図からも明らかなように，型紙に関する記述に大きな違いが認められた。両国の型紙教育の差異をより明らかにする為，表４は，教科書中の型紙に関する記載内容を一覧にし，各教科書の型紙に関する記載の有無を○印で示したものである。表４から，型紙に関する記述には両国で共通する項目が少なく，各々独自の「型紙」の概念を持っていることが分かる。

日本の教科書では，被服製作の前段階である構成理論に関する項目で，型紙が扱われている。一方，米国の教科書では，型紙に関して多様な内容を扱っていることが読み取れる。型紙の選び方を事例にすると，日本の教科書は共通して「胸囲と背肩幅，腰囲と胴囲を基準にして選ぶ」という記述に限定されるが，米国の教科書は「自分の裁縫技術に適するか」「自分に似合うか」など，多くの観点から検討することが記載される。

（１）　米国における「型紙」に関する指導内容

米国の「型紙」に関する指導内容について具体的に記す。テキスト「Ｓkills for Ｌiving」に記載される「型紙を決める」という項目の中には，「技術を考慮する」「どのようなスタイルが最も良いか」という内容が含まれる。「技術を考慮する」という内容では，各自の技術を把握し，そのレベルに合

表 4　教科書中の型紙に関する記載内容

	日本の教科書							アメリカの教科書				
	A	B	C－1	C－2	D	E－1	E－2	A	B	C	D	E
人体と型紙との関係について					○							
立体裁断法について					○	○						
型紙作成について	○		○		○	○	○					
・原型	○		○		○	○	○					
・囲み製図			○		○	○						
型紙の決め方	○		○			○	○	○	○	○	○	○
・体型								○			○	
・裁縫技術								○	○	○	○	○
・時間												○
・費用												○
・サイズ								○		○	○	○
・胸囲と背肩幅，腰囲と胴囲を基準にして選ぶ	○		○			○	○					
・ワードローブ											○	
・自分の活動に合うかどうか											○	
・自分に似合うか（デザインのラインなどを考え合わせて）									○	○	○	
・目的を考える												○
カタログから探すときのポイントについて												○
簡単に作れるスタイルの探し方												○
型紙カタログについて								○	○	○		
多サイズの型紙について									○			○
型紙の封筒が示す情報について								○	○	○	○	
ガイドシートについて								○	○		○	○
型紙のパーツの準備のし方について								○				○
型紙にある記号についての説明								○			○	
縫い代について									○			
補正に関する記述のみで方法が載っていない						○						○
補正のし方							○	○	○		○	
・丈の調節							○	○	○		○	
・幅の調節							○		○		○	
・型紙を立体的にして体に合わせる											○	
型紙の置き方，印付けについて									○			○

わせた型紙が選べる能力が求められている。このように各自の技術と関連付けて型紙を選ぶことを指導している。

「どのようなスタイルが最も良いか」の項目では，自分に似合うデザインを選ぶこと，ワードローブのことも考えて実際に活用できる衣服の型紙を選ぶことが指導されている。

これらのことを考え合わせると，米国の教科書では，技術やデザインも含めて「個」に応じた市販型紙を如何に選ぶかという点に重点が置かれていると考えられる。

また，日本の教科書では記載されないが，米国の教科書に共通して記載される内容として「型紙の封筒が示す情報について」「ガイドシートについて」という項目がある。

「Building　Life　Skills」においても「型紙の封筒が示す情報について」の記載内容を示したものや「ガイドシートについて」の内容が記載されている。

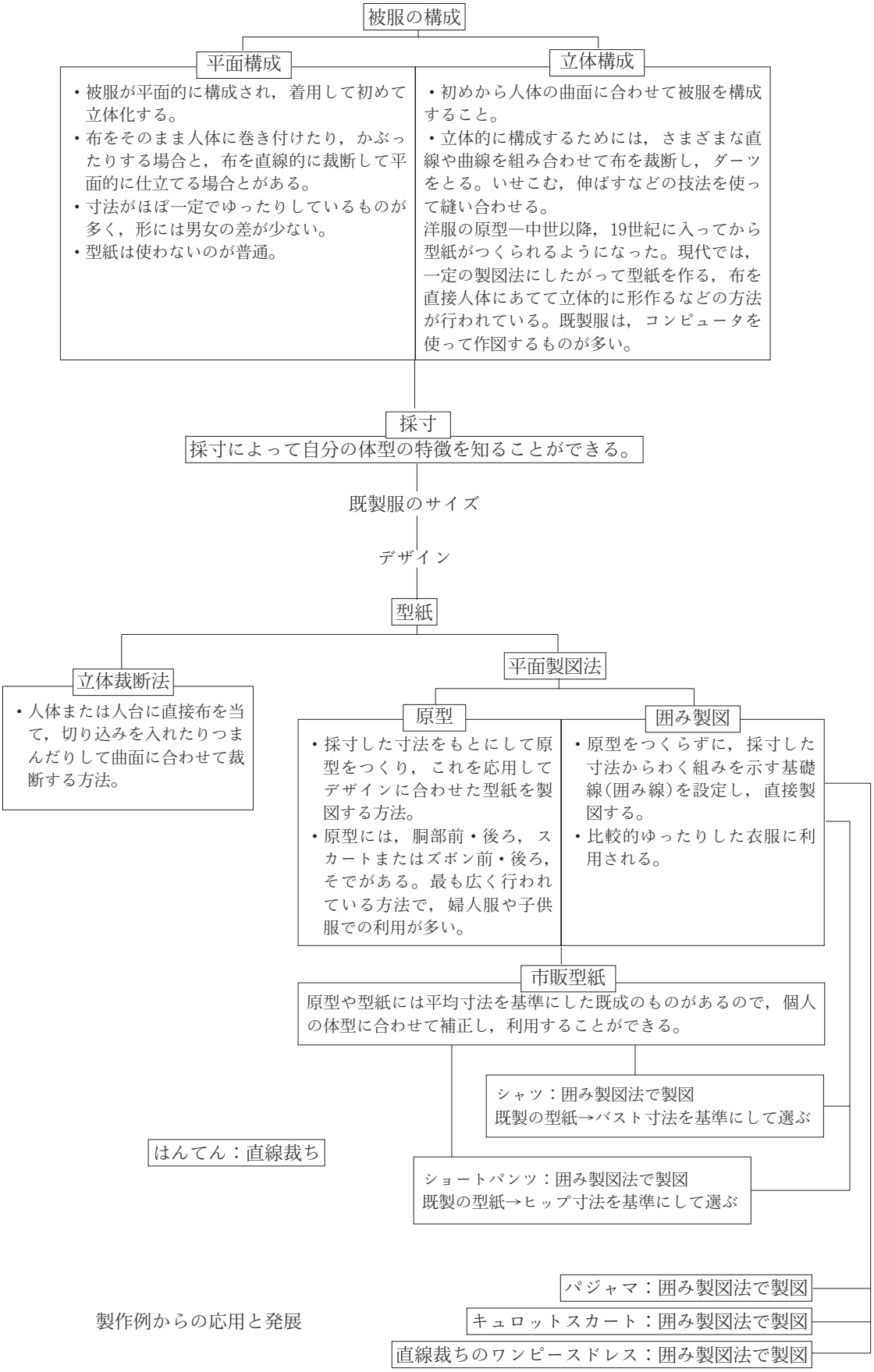
このように型紙が入っている封筒及びガイドシートに記載される情報の種類についても詳細に説明がされる。市販型紙を活用する際に必要な「情報」の活用について，日本よりも積極的に指導していることが伺える。

（2） 日本における「原型」「囲み製図」「市販型紙」の併用

図 5 は，平成 5 年検定の日本の「家庭一般」教科書に掲載される，被服教材と使用される型紙との関係を図式化したものである。この図から，同一の教材でも様々な型紙が活用されていることが分かる。教材「パーカー」を例にすると，出版社により用いられる型紙は「原型を基にした型紙」「囲み製図」「他の型紙応用」などと異なる。教材「スカート」の場合も「原型を基にした型紙」「囲み製図」「市販型紙」など，教科書により異なる型紙が採用されている。教材「ショートパンツ」は，「囲み製図」の採用が 6 教科書，「市販型紙」の採用は 1 教科書である。

このように型紙の作成の段階から立体構成の理解を試みる教育方法が基本的に採用されながらも，型紙を活用するレベル及び指導方法についての統一がなされていない点が，日本の被服構成の特徴で

図５　日本の教科書における製作関連内容の構成図



あり問題点でもあると考える。それは，活用する型紙及び製作方法により，教育効果が異なることが考えられるからである。この点については，次稿で検討する。

現在見られる「原型」「囲み製図」「市販型紙」が併用される型紙教育の変遷についても次稿で述べたい。

6，おわりに

本稿では，日本と米国の中等教育家庭科における被服構成の指導内容を比較し，日本の被服構成の指導内容の特徴を明らかにした。日本の調査対象教科書は，平成5年に検定の「家庭一般」7冊，米国の教科書は日本と同年代で使用し，「家庭一般」と類似した領域構成の教科書5冊を調査対象とした。両国の被服構成に関する指導内容を比較した結果，以下の特徴がみられた。

米国の場合，学校教育では基礎的技術に関する理論とその応用について学ぶが，技術の活用は各個人に委ねられている。被服製作は，各自が「市販型紙」を活用することが前提となり，社会との連携に積極的である。

一方，日本の場合は，文化的背景から「原型からの製図」「囲み製図」「市販型紙」など，多様な型紙教育が行われている。これは平面構成の衣文化であった日本が立体構成を理解する過程が，「型紙の作成」というかたちで，今日まで学校教育の中に残されてきたのではないかと推測する。

今後は，戦後に米国主導で始まった被服構成の教育内容の変遷について，型紙教育の推移を中心に検討を加えたい。また，前述した型紙の違いによる教育効果の差異についても検討を試みたい。

注

1）夫馬佳代子・犬飼優希，米国からの寄贈教科書に記載された被服構成内容，日本生活文化史学会誌，38，51-60，2000.

2）藤田恵子，女子上半身原型製図法の変遷―原型出現から昭和20年まで，日本家政学会誌，51，414‐423，2000.

3）藤田恵子，女子上半身原型製図法の変遷（第2報）―第2次大戦後から1970年まで―，日本家政学会誌，52，33-42，2001.

4）藤田恵子，女子上半身原型製図法の変遷（第3報）―1970年から1990年まで―，日本家政学会誌，53，31-41，2002.

5）岡田香，洋裁教育は型紙で―型紙洋裁の諸問題，家庭科教育，27巻5号，30頁，家政教育社，1953.

6）牛込ちゑ，洋裁製図の指導について，家庭科教育，28巻5号，26頁参照，家政教育社，1954.

7）西島芳太郎，型紙教育に反対する―アメリカの教育視察団の皆様へ―，家庭科教育，27巻5号，35頁，家政教育社，1953.

8）前掲書　注7）35頁引用.

9）萩原須尚，型紙制定の経過とその取扱について，家庭科教育，23巻10号，24頁引用，家政教育社，1949.

10）田中陽子，小学校裁縫科における洋裁教育推進の背景―大正後半期および昭和戦前期を中心にして，家庭科教育学雑誌　47－1，38-46，2004.